博士論文執筆体験記

平成20年３月修了生　**拝野寿美子**

１．研究環境

私の研究環境は「社会人」「子持ち」「他大学修士課程からの入学」という、あまり恵まれたものではありませんでしたが、唯一有利だったのは、職場が大学図書館内にある研究所であったことです。研究者を目指すきっかけになったのも、この職場への転職でした。

２．研究について

学部時代のブラジル留学の際友達になった日系人たちが、90年の改正入管法施行にともない、日本に働きに来るようになりました。慣れない環境で奮闘している彼女たちに対し、何か役に立てる研究ができないものかと思い、ブラジル人の子どもたちの教育を研究テーマに選びました。

このテーマを追求するには、フィールドワークが不可欠でした。上記の研究環境から、思うように調査がはかどらないこともありました。一方で、子連れだとインフォーマントの方々も警戒心を持たずにいろいろとお話ししてくださることもありました。とにかく、調査先の方々との信頼関係を築くことを心がけました。

３．指導教員

主指導教員の佐藤郡衛先生とは、入試の面接が初対面でした。修士時代にお世話になった故・江淵一公先生のご紹介でした。佐藤先生は私の研究環境をご理解くださり、ゼミの時間や論文指導など様々ご配慮いただきました。

副指導教員が途中で転出されるなどの思わぬハプニングがあったことも今では懐かしい思い出です。とにかく、副指導教員の授業をとれない状況にあったので（何と、修了までの取得単位は佐藤先生のゼミ分16単位を含めてたったの24単位！）、研究の進捗状況や投稿論文の採択状況など、何かあるたびに報告を欠かさないようにしました。

４．執筆までのスケジュール

１年目はフィールドワーク、ゼミ履修、連合の合宿参加が主な活動でした。学会で修士論文の要約を発表し、博士論文のテーマを考え始めました。研究室の先輩の投稿論文のための細かいスケジュール表をのぞき見て、奮起しました。

２年目の活動も同様に、フィールドワークと査読論文執筆、ゼミ履修、連合の合宿への参加でした。学会でフィールドワークと文献購読のまとめを２回発表、博士論文の構成を考え始めました。「構成」については、主・副指導教員にたたかれ続けました。研究室の先輩の「投稿論文が要修正で戻されたら絶対その時に書き直して提出すべし」との言葉を忠実に守りました。

３年目もフィールドワークを続けました。学会でフィールドワークのまとめを１回発表した後、９月に第２子を出産。産休・育休を利用してデータの本格的な分析を始め、10月から（提出１年２か月前）から執筆を開始しました。

４年目は５月の講座の中間審査までに草稿を仕上げ、その後は審査会で指摘された箇所を中心に論文に修正を加えていきました。提出にあたっては、佐藤先生が12月10日の提出期限２日前まで修正箇所を指摘してくださいました。

審査会では、「みな、良い論文を書くために協力してくださる先生方である」と自分に言い聞かせてのぞみました。また、秋の審査会では、前回指摘を受けた箇所をどのように修正したかを表にして添付するなど、工夫しました。

５．なぜ博士論文が書けたか

入学式の後の説明会で、専任教員の先生がご自分の学生さんについて「彼女が３年で書けなかったら私の責任です」と明言されました。これを聞いて、私の中から「書かない」という選択肢が消えました。

そして、最終年の５月の審査会で「12月提出を目指しても良いでしょう」というご判断をいただいたあと、佐藤先生が会議室を出て右手でガッツポーズをされました（ご本人は記憶にないかもしれません）。このガッツポーズが、私のラストスパートを後押ししてくれました。

家計をやりくりする主婦の立場から、いつまでも学費を払い続けるのはもったいないという思いもありました。

さらに、子守を買って出てくれていた私の母の「一体いつ終わるの？」との悪気のない言葉が、大きなプレッシャーにもなりました。

追い込みになってくると、気持ちのコントロールが難しくなります。こういう時に限って子どもの体調が悪くなったり、仕事が忙しくなったり・・・。そんな時は、「博論なんかに負けてたまるか。今が一番苦しい時だ。これが終わったら天国だ！」と思ったり、逆に「今が一番楽しい時だ！みんなが私の博論のために協力してくれている！この、幸せ者！」と思ったりして、「大丈夫、大丈夫」と呪文をとなえながら通勤しました。

６．書き終えて

無事論文を提出した帰りに寄ったレストランで「この私がよくぞ！」「皆さんに感謝！」といった思いが涙となってあふれ出てきました。

その後は、最終審査会で各先生からご指摘いただいた点、論文の最終章に書いた「今後の展望」の実現に向けて取り組んでいます。いまだ、道半ば。挑戦はまだまだ続きます。

在校生の皆さん、「書かない」理由を探しませんように。絶対に書けます！かげながら、応援しています。